

地域人材育成研究 第一号

特集

各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

愛媛県立三崎高等学校

せんたん部生徒インタビュー

樋田有一郎

インタビューは二〇一九年六月二四日、一四時～一六時まで、三崎高校の図書室で、三崎高校が選んだ生徒四名に対して行われた。「せんたん部」の担当教諭が同席して、生徒の活動内容について補足説明を行った。インタビューは樋田有一郎ほか地域人材育成研究会の大学研究者一名である

あらかじめ用意してあったインタビュー項目は、

- A. 活動のやりがい
 - B. 自分が活動に参加して得たと思うこと、自分が変化したと思うこと
 - C. 地域についての思い
 - D. 将来の地域との関わりかた
 - E. その他
- である。

調査概要

インタビューアー…樋田有一郎ほか地域人材育成研究会の大学研究者一名

インタビュー日…二〇一九年六月二四日

インタビューイー…三崎高校生徒 松山（三年生）、西条（二年生）、伊方（三年生）、上島（三年生）

「せんたん部」ってどんな部？



— 皆さんは「せんたん部」とのことですが、なぜせんたん部に入ろうとしたのかを始めに聞いてもいいですか？

松山 僕はもともと他のグループに入りたいことを希望していました。

せんたん部に入るきっかけになったのは、ある先生に「やってみないか？」と言われたことです。自分で言ってしまうのですが（笑）、入部することを「熱望」されました。

三崎教諭 はい、熱望しました（笑）。

松山 地域を動かしていく裏方の仕事だと聞いて。

自分は裏方のほうが得意で、裏方メインで立ち回りたいと思って入ったのが、一年目の始まりです。

二年目の今は、せんたん部の活動がどんどん大きくなって、続けていけばもっと大きくなるのではないかという思いで活動をしています。

— せんたん部の部長さんとして。

松山 前年度に部長をしていました。

— それは「自分がせんたん部を変えていこう」、と部長になったわけ

ですか？

松山 結構、成り行き感がありました。

——バトンを渡された現部長の西条さんはどうですか？

西条 もともと私は三崎出身ではなく、ここから三時間半から四時間かかる市に住んでいて、高校入学と同時に三崎に引っ越してきました。

入学したときは、地域のことにはそれほど興味はありませんでした。

あつたとしても自分から活動したいという思いはありませんでしたが、一年生のときに「せんたんミーティング」というせんたん部が行っていた行事に参加して、地域のことを考えることが楽しくて、入りたいて感じました。

二年生になって、グループを分けるときに「入ろう」と決めて入りました。

——せんたん部の印象は入った後に変わりましたか？

西条 去年の先輩たちはすごい人で、いろいろとヤバイといえますか。

いろいろな方面に長けている人ばかりで、学校のトップが集まったようなグループでした。それで入りづらいと感じましたが、入ってみたらそうでもなくて、みんな普通の人でした。どちらかといえば変わっているところもありますが、今は楽しいからいいです。

——皆さんに聞きますが、せんたん部は学校のトップですか？ 憧れ

のような人たちですか？

三崎教諭 一年生に聞かないと分らないです。どうでしょうか？

一年生は、君たちのことをどう思っているのか？

上島 私は去年一年間、入っていませんでしたが、すぐ入りたかったです。

三崎教諭 今いるメンバーで、最初からいたのは松山と伊方の二人です。

——伊方さんは、せんたん部にどのような経緯で入りましたか？

伊方 私は昔から前に出るのがあんまり好きではありませんでした。

高校に入って、せんたん部とは別に生徒会に入ったのが、せんたん部に入るきっかけになりました。

私も（松山）タケシ君と一緒に、最初は別の班に入ろうと考えていましたが、先生からせんたん部に入らないかと言われました。私はVYS部（※）というボランティア活動に入っていて、そこでイベント参加のお手伝いをする係をして、裏方がすごく楽しいと感じました。せんたん部でも、地域のイベント企画の活動ができるだろうと思っ

て入りました。

——実際に入ってみて、大変でしたか？

伊方 確かに準備や前々から段取りを考えるのは大変なこともありませんが、実際に自分たちが企画したものに人が集まって、それで地域を少しでも盛り上げられたら、うれしいです。
大変さよりもうれしさや、実施して良かったと感じるほうが大きい
です。

——上島さんは？

上島 私は一年生のときに体操をつくる班に所属していて、二年生になってもその班を継続することになりました。

私は体操をもっと普及させたいと考えていたので、二年生の頃はずっと体操をしていましたが、せんたん部を見ていて、せんたん部のような活動をしたいい気持ちが大きくなりました。

今年には体操を続けるべきか、せんたん部に入るべきかですごく迷いましたが、後輩のためにも私がずっと体操をしているは駄目だと感じ、後輩に体操を受け継いでもらい、せんたん部に入りました。

※VYS運動

昭和二十七年に愛媛県で生まれた、社会の福祉と子どもの幸福のため「友愛」「奉仕」「理想」の三つの綱領を掲げた青少年のボランティア運動。VYS (Voluntary Youth Social worker) は学業や勤務のかたわら、ボランティア運動を通して美しく明日のふるさとづくりを努力しています。

みさこう体操一一五



三崎教諭 いろいろな地域の行事で体操をしています。

——「みさこうたいそう一一五」ですか。

上島 はい。

三崎教諭 彼女が創立責任者です。

——みさこうたいそう一一五の苦労話を教えてください。

上島 本当は体操をつくるのがメインではありませんでした。

もともとは「健康班」という名前で、体を動かすことで地域おこし
ができないか、と体操をつくることになりました。

今は佐田岬のPRソングを使っています。最初は違う曲でつくって
いましたが、地域おこしなら地域の曲を使ったほうがいいだろうと、
その歌に変えました。

人前で話すことは好きではありませんでしたが、私が真ん中に立つ
ことが多く——上から見ると体操をしてきている人の顔や、してく
れてない人がよく見えます。

たくさんしてくれていると、うれしいです。

体操していない人がいると悲しい気持ちにもなりましたが、逆にそ

れを見てしゃべり方を変えたらもつと体操してくれるんじゃないか、と改善点も見えてきました。

二年生に上がったときには、一年生のときのメンバーの中で残ったのは私を含めて三人しかいなかったのです、すごく悩んだ部分もありましたが、今は後輩に託しているので不安な面はありません。

いかにたくさんの人に体操をしてもらえるかについては、苦労しました。

——おじいちゃんやおばあちゃんが、ニコニコしながら体操しますか？

上島 楽しそうにしてくれて、すごくうれしいです。

やりがいについて



——僕が高校生のときはバスケットボール部やサッカー部が学校で輝いている時代でした。

それと比べても楽しそうに見えますが、なぜ「せんたん部」のほうがいいのかと言われたらどうですか？

松山 僕は運動が全く駄目で、運動部はモテるだろうという気持ちはありましたが、高校では運動を諦めることにしました。

自分が輝く場所は、頭を使う場所しかありません。

三崎教諭 彼が自主制作映画の主演です。

——映画で海に飛び込んだときは、実際には泳いでなかったんですか？

松山 泳いでないです。実際にあんなことをしていたら今、この世にいないです(笑)。僕ではないです。

運動をするよりは、話し合いで意見を出して、何かをつくっていくほうが自分には合っていたので、映画制作を始めました。なんで続けられるかは、数値的な結果があったほうが達成感は大いからです。

せんたん部では、具体的な数値の成果はあまりないのが現状ですが、地域おこしの面で地域の人に笑顔になってもらうのは、すごく達成感を覚える側面でもあります。

せんたんミーティングや映画の上映、中学生を対象にしたアウトドアのアクティビティーなど、たくさんの人に楽しんでもらえる部分があるので、その面で続けられています。

喜んでもらえることは、すごいやりがい感じます。

西条 私はせんたん部に入るとき、吹奏楽部にも入っていました。

吹奏楽部は大会には出ずに地域のイベントに出ることが多いです。地域のイベントではおじいちゃんやおばあちゃんが笑顔で見てくれていて、小さい子もノリノリと一緒にダンスを踊ってくれることがすごくうれしかったです。

それも、せんたん部につながっています。

せんたん部で自分が直接前に出ることはありませんが、裏方の仕事が見んなの笑顔につながっていくので、すごくやりがいになります。それが今まで続けてこられていて、すごく好きな理由です。

——自分は裏方でもいい。シユートを決めるよりも。

西条 そちらのほうが目立つし、カッコいいですが、一番しんどいのは裏方なので、それを自分ができていることは誇りです。

多分、気づいてもらえないだろうけれども、見てくれている人は見てくれているので……。それが好きです。

——それは地域の人に言われるわけですか？

西条 せんたん部が新聞やテレビで取り上げてもらえるので、それで声を掛けてもらうことがあって、うれしいです。

——伊方さんにとってのせんたん部のやりがいとは？

伊方 地域の人と一緒に活動をしてくれること、自分たちが考えたことで喜んでくれているときや楽しそうにしてくれているときに、活動していて良かったと思います。

さつきもお話しましたが、VYS部に一年のときから入っていて、自分たちが裏方としてイベントで手伝いをしたことが後々、別の形となってみんなに喜んでもらえる。それを見たら活動して良かったと思うし、それはせんたん部とも似ているので、今まで続けてこられています。

——上島さんは？

上島 一、二年の頃に体操をしていて。

体操は人前に立つ活動でした。人前に立って直接関わることややりがいがあったり楽しくあったし、自分はどちらかといえば人前でもしたいのですが、さつき西条が言ったように、企画などで直接関わってなくても、自分たちが裏でしてきたことが地域の人のためになることは、すごくうれしかったです。

自分は地元がすごく好きなので、三崎をもっと良くしたい思いが一番強くて、地域おこしを続けられています。

地元が好きとは



—— 地元が好きですか？

上島 はい。

—— 地元が好きというのは、どんな感じですか？

上島 確かに交通の便やお店の数で考えると便利ではありませんが、小さい頃から知っている人もいるし、こちらが知らなくても向こうが私を知ってくれていることもあります。

助け合いといいますが、そのような心や気持ちがすごく好きですし、自然も豊かです。

私は人混みがそれほど好きではなくて……。お祭りも人は少ないですが、盛り上がることは好きです。

何がといわれると難しいですが、いろいろな所へ行ってみても一番住みやすいし、ずっといたいと感じたのは三崎でした。安心できると思いますか、過ごしやすいと感じたのも三崎です。

—— 週末もずっと地元ですか？ それとも週末は、どこかに遊びにいきますか？

上島 たまに遊びに行くくらいです。

——松山あたりのイオンに行くのですか？

上島 分かります。

松山 結構、人によってまちまちです。

——みなさんに聞きますが、誰かから「三崎はよくない、三崎はよく分らないところ」と言われたら、どんな気持ちになりますか？ そんなふう言われたら、どう言い返しますか？

松山 僕は地元の間人ですが、実のところ、今まで三崎に対してあんまりいいイメージを持っていないタイプでした。

自分の場合は合わない部分も多いですが、合わないと言っているだけではよくないと感じて、今は変えようと動いています。

もともとそういう立場だったので、三崎に対するマイナスな意見があっても、受け止める部分のほうが多いです。

マイナスな意見を言われて感情的になるのではなく、客観的な意見なら改善する必要もあるんじゃないか？ 逆に改善する必要はなくて、このままでいい伝統的な部分はちゃんと残すように向き合っていく必要もあるんじゃないか？ と受け止めたいです。

西条 私は三崎の出身ではないので、どちらかといえばあまりいいイメージはない側でした。

三崎に入学を決めたとき、育った地域の友達からは「行かんほうが

いいよ」や「何もいやん、あそこ」とすごく言われました。

確かにそうですが、三崎にすごく引かれたから私は決めたので、そんなふう言っただけはしくなりました。悔しいといいますが、来て見ただけから言っただけはいいという気持ち大きくて、こういう活動にも参加しようと考えました。もともと知っただけはいいし、いいところもあるので、それを説明したいです。

伊方 実際に三崎も完璧なわけではないので——完全否定といいますが、三崎は絶対に駄目と言われたらあんまりいい気持ちはしませんか、他と比べて言われた場合には、そこは素直に受け止めます。

少しでも良くできるなら、良くしていけばいいことです。相手も言うからには何か理由があるので、それはそれで聞いてみて、もつといい地域にしていきたいです。

上島 私も高校生になるまでは、田舎にはいたくないから絶対に高校を卒業したら県外に行こうと考えていました。

本当に何もなくて不便で、買いたいものも買えないし、流行りにも乗れないとずっと感じていましたが、高校に入ってからちょっと気持ちが変わりました。

個人的な意見ですが、田舎にいますとお金を使う場所がないです。逆にお金で得るものよりも気持ち良くなると思いますか、お金を出さなくても自分がいいと思えることがあります。

田舎が好きなら、都会が好きなら、それは仕方ない

もし便利さを優先する人に言われたのであれば、それは仕方ないと受け止めることもありますが、田舎にも素敵などころがあると教え

第3回 高校生が地域でつくる高校生イベント

せんだんミーティング

ごあいさつ
知らないことだらけ、知りたいことだらけの私たち、佐田半島の先頭に立ちやっちゃんから高校生が集まって、出会い、語り、遊び、叫ぶ「せんだんミーティング」を開催します。イベントをきっかけにそれぞれの地域がより一層盛り上がりそうですよ！
※ 観覧自由となっています。みなさまのご来場をお待ちしています。

会場 県立三輪高等学校 せんだん館

先端にてあう
9/28(金) 13:00- 会場：伊方町役場三崎総合体育館
※ 各校の活動事例発表
※ 地区予定：限校6校

先端でかたる
9/28(金) 14:30- 会場：伊方町役場三崎総合体育館
※ 各校の活動事例発表
※ 高校生が各校の生活課題と活発な意見交換をします。

先端をあそぶ
9/28(金) 17:10- 集合：伊方町役場三崎総合体育館
※ 各校高校の生徒たちと三崎の子ども達
※ 軽力田先頭（佐田半島）の場所をご案内します。※ 当日はスペシャルゲストも登場します！

先端でさけぶ
9/29(土) 10:00- 会場：伊方町役場三崎総合体育館
※ プログラム交流をうけた参加メンバーによる音楽
※ このイベントをつうじて生まれた「宣言」を発表します。

場所 伊方町役場三崎総合体育館 観覧自由
（佐田半島新田伊方町三輪6-9-9）

2019 9/28-29

てあげたいです。

逆に田舎の人であれば、お互いに共通点もあるので、「こうすればもっと良くなる」という改善点を相手の人と共有したいです。

——よく分かった気がします。

単に郷土愛があつて、ここが大好き、とはちょっと違った感覚を持っているのだと感じました。

都会を全否定するのでもないし、地元を全否定するわけでもない。全肯定でもないですね。

どちらにも良さがあつて、自分で良くしていくことや、自分で自分の良さを見つけていけばいいと、受け取りました。

ちょっと感動しました。

自分の成長について



——自分が変化したことを教えてください。

上島 私は生徒会長をしています。小学校と中学校でも会長をしていました。

中学校を卒業した後は、前に立つことはせずに普通の高校生活を送りたかったのですが、せんたん部を見ていて、活動したいと感じました。それでも前に出るのは得意ではないのですが、活動のなかでたくさん人前になる機会が増えたので、人前で話す力や緊張をしなくなった面では成長できました。

伊方 私も自分が前に出なくてもいいと考えていましたが、せんたん部に入って、自分も前に出てもいいという気持ちになりました。

今までよりも自分がしたことや、意見を言うようになりました。人前に出るのは今でも緊張しますが、少しずつ人前で話すのが好きになりました。

——せんたん部では、いつも緊張でドキドキしながら活動をしている日々ですか？

伊方 そんなことはないです。せんたん部ではみんな円になったり、机をくっつけて話をしているので。

でもせんたん部の「活動報告」がたまにあつて、そのときは緊張します。

西条 私は全校生徒が六〇〇人以上のマンモス中学校にいたので、個性を出して自分がしたいことをするのができないといえますか……やりづらかったです。

周りの意見に流されることも多くて、それが嫌だったので小さい高校に行きたいと、三崎に来ました。

三崎は自分がしなければ誰もしてくれないことがたくさんあります。自分から積極的にやる必要があるので、誰かを待つのではなくて自分で前に出ていけるようになったのが一番、成長したところです。

——自分から「あの人に働き掛けてみよう」というような気持ちになるわけですか？

西条 距離が近いので、あの子に言ったらしてくれそう、というのが見て分かるようになりました。

それで同じ学年の人にも話しかけられるようになつたし、変わりました。

——松山君は？

松山 考え方の面で変わったところがあります。

悩む前にとりあえずやってみたらいい、と思うことが増えました。ある先生の影響が大きいです。

失敗するのが絶対に駄目ではないことに気がついて、失敗したら失敗したで教訓になって、成功すれば成功体験として、ちゃんと地域おこしにつながります。

やってみないことには何も起きないので、やってみることがすごく大事な部分であることに気がつきました。

もう一つは、前年度にせんたん部の部長をしていて、人に仕事を振ることが大事だと感じました。

今まで自分がリーダーとして何かをすることがあつても、人に仕事を振るのが面倒くさくて、自分で全部やればいいと思う部分がありました。

ただ、人に振らずに自分だけでやっている、周りの人たちはどう動いていいかも分かりません。もし自分のところで動きが止まつてしまつたら、そこで企画全ての進行が止まつてしまうので、ちゃんと周りに仕事を振ることも必要なことに気がつきました。

——大変だつたことや、失敗したけど良かったと思えることは？

松山 今まで二回開催している「せんたんミーティング」というイベントがあります。県内外の高校生や大学生に来てもらつて、地域おこしの活動報告してもらいます。

地域の人にも見学してもらえるイベントですが、集客があまりよくありません。

原因は広告を出すのが遅かつたというのが一番あつて、広告をもつと出していたらもつと人が来てくれたのでは、という反省があります。

本年度も「せんたんミーティング」を開催するので、広告を早く打

てばもっと人が来てくれるんじゃないか、と。
改善点が見える失敗だったので、悪い失敗ではありませんでした。

裏方の仕事を巡って

——皆さん「裏方」がテーマになっていますが、裏方として調整することや話し合いをすることは、自分にとって何か残るものはありませんか？

松山 裏方の仕事は、高校になってから初めてするようになりました。今まで話したのはポジティブな面で、ネガティブな面もあります。

自分は、話し合いが得意ではありません。話し合いの場面になった途端、ありきたりで型にはまった意見しか出てこなくなるので。

逆にみんなはすごく「斜め上のアイデア」を出してくれるので、すごいと感動する部分もあります。

裏での話し合いは表の人が見ることはないので、そこが知れることが裏方をしていて面白い部分です。

——自分にはないものと、人にあるものに気づく機会になるわけですね。



将来の地域との関わり方



—— 高校を卒業した後、五年後、一〇年後、二〇年後、三〇年後や老後まで——みなさんが今、思っていることを教えてください。

松山 自分は高校を卒業したら、県外の大学への進学を第一希望にしています。一回地元から離れて、地元とは関係ないことを学ぶ予定ですが、そこで関わりを切るという考えがあるわけではありません。今の時代はインターネットが普及しているので、都会と田舎の隔たりが薄れているような気がしています。

実際に三崎へ赴く必要があるかといわれると、そうではないと考えています。現地に行つて活動するよりも、ネットを使ったデジタルな関わり方が個人的に好きなので、そちらで関わられたらと考えています。

—— 都会だけにこだわるわけでも、田舎だけにこだわるわけでもないのですね。

松山 はい。

—— インターネットを通してというのは？

松山 まだ全く具体的ではないのでざっくりなんですけど、そういう関わり方が理想です。

——それは都会と田舎が違うから両方に関わりたいのか、どちらも同じように考えることができるからですか？

松山 自分は都会のほうが好きですが、地元を断ち切るのは思い入れもあるので無理です。関わりには未練があるので、個人的な好みの部分で関わりたいです。

——何歳ぐらいまでには帰ってきたい、とかありますか？

松山 三崎に帰って、住むことはないです。

将来のことはまだ思いつかないので、大学に行ってから考えていきます。

西条 私はまだ卒業まで一年半ぐらいあるので、高校の間は新一年生を集めたい、というのが大きいです。三崎高校を存続させたいので、そこに力を入れたいです。

高校卒業後は、県外の大学へ行きたいです。

せんたん部の活動を通して、大人や同世代の高校生と関わって思うのですが、いろいろな考え方を持つことが、地域おこしの案を出すことにとって一番大切です。それを身に付けるためには、外や、全く知らない土地に行くことがいいと考えているので……。

県外に出て、世界に出て、いろいろな経験を積んでから三崎や日本に帰ってきたいです。

——ここにいるだけでは、三崎のことは分からないですか？

西条 分からないです。三崎に来る前に知っていたこともありましたが、三崎の良さは住んでみないと分かりませんでした。

そういうことを他の地域に行ってもしたくて、それを三崎やどこかの地域に還元したいです。

——将来、住む場所についてはどうですか？

西条 何十年後かには三崎に帰ってくる予定で、それまではいろいろな所を転々としています。

伊方 私は今のところ、将来は公務員がいいと考えています。

そう思うようになったのは、三崎高校に入学して、せんたん部に入って、地域の活動を始めたことにあります。

進学先の希望は県内で、愛媛大学の社会共創学部に入って、どうしたら地域をもっと盛り上げられるかを学びたいです。

公務員になって、この伊方町に実際に戻ってくるかは分かりませんが、県内に就職して自分が得た知識や経験を生かしていきたいです。地域のために自分ができることをしたい、と今は考えています。

——自分の強みや得意な分野など、実際にしてみても良かったことや、将来に何かつながるのではないかと予感を抱いたものはありますか？

伊方 私は普段の生活で下を向いて歩くことが多いです。直接は関係

ないかもしれませんが、人と見るところがズれているといいますか、考えるところが本当にズれています。

人が気づかないことを考えるのが好きです。独特だと思います。

——それはみなさんも感じますか？

西条 結構な頻度で感じます。

上島 生徒会でも、すごいです。

三崎教諭 変なところに気がつきます。

——上島さんは？

上島 私も伊方さんと同じで、県内にいたい気持ちが強いです。

進学先も迷っていますが、第一志望は愛媛大学の社会共創学部です。

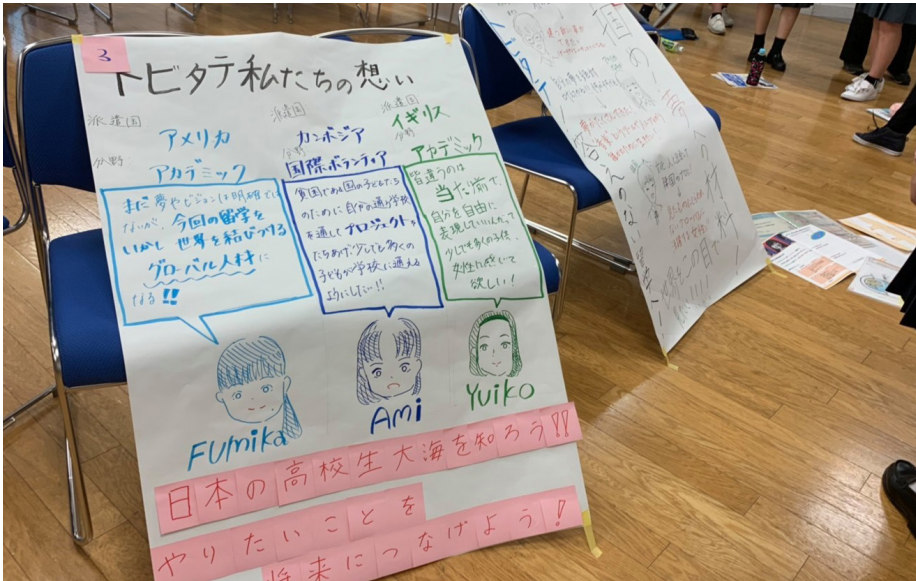
前の二人と逆の意見になりますが、私は直接、見て体験しないと分からない部分もあると考えています。愛媛には三崎と似たような地域がたくさんあるので、たくさん場所に行つて、もつと情報を集めて地元に戻つて生かしたいです。

逆に自分が得た意見を県外の人や、世界にいる人に共有したら、もつと良くなるんじゃないか？

県内にとどまるのではなく、外にいる人との関わりはずっと持ちたいですし、三崎が好きなので、行事のときには帰ってきて参加したいです。

将来的に三崎に住むかは分かりませんが、大人になったときには少し、三崎から離れた所で暮らしてみたい気持ちがあります。

友人関係を巡って



——友達との関係については誰もが気にすることですが、皆さんは場合によっては小さい頃からお友達なわけですよ。友達が成長したと感ずる場面はありましたか？

上島 他から来た子に三崎の話をしてしまうと、疎外感を与えてしまうといひますか……。

友達に直接言われたこともあります。「三崎じゃないけん、その話ちよつと分らんな」つて。

どちらかひえば三崎高校はそちらのほうが多いです。その子は、三崎に來てからは地域おこしの活動に積極的になつて、一年生の頃は人前で話すことがあんまり得意そうではありませんでした、いざ人前に出てみるとすぐくしゃべるのが上手でした。私は他から來た子の成長を見るほうが多かつたです。

——他から來た子と自分の違ひや、三崎から上がったきた子との違ひを感じて、ライバル意識を燃やすこともありますか？

上島 ライバル意識はないです。

——三崎から上がったきた子にとっては、外から來た人はメキメキと変わるのがよく見える対象なのですか？

上島 はい。

——逆に町外からここに来ると、どつという感じですか？

西条 異国の人みたいといいますが、考え方も違います。

三崎は結構な田舎なので、人が少ないから地域の関わりも近くて、最初はそれがうらやましかったです。同じ中学校同士の子で「あそこ、行こうや」と言っているけど、私にはそこがどこなのか分からないことが結構あって、それがうらやましかったです。

住んでみると、今でも分からないところはいっぱいありますが、人数が少ないのでみんなずっと同じクラスです。同級生も二年生は二四人しかいなくて、三年間ずっと一緒のメンバーなので、距離が近くなって、出身もどうでもよくなります。自分たちの中の思い出もどんどん増えていって、それがうれしいです。

二年生になってからは、「ああいうことがあった」と話す回数が多くなって、私はそういう経験がすごく楽しいし、みんなと長い時間過ごしてきたことが実感できます。

——僕のとときは「高校デビュー」がありましたけど、皆さんは高校デビューしましたか？

三崎教諭 残りのみんなは旧三崎町出身だから、小さい頃から一緒にす。

——もうデビューの感じではない空気ですか？

上島 エスカレーター式です。

三崎教諭 三崎は保育園からみんながずっと一緒です。西条も別に「デビュー感」はなかったです。

西条 私は入学式のあとインフルエンザにかかりました。

三崎教諭 鮮烈なデビュー（笑）。

西条 最初からずっこけました。

教員との関係、先輩後輩関係



——ここまでではあらかじめ用意した質問でしたが、「これは伝えたい」ということはありませんか？

三崎高校のいいところでも、先生のいいところでも、生徒のいいところでもいいです。

松山 先生の仲がすごくいいです。職員室の雰囲気も明るいです。

上島 先輩と後輩で敬語もありますが、それを除いたら仲がいいです。

こんなに仲良くして大丈夫なのかと自分が思ってしまうぐらいですが、自分が二年生や三年生になって、後輩の子たちが緊張せずに気軽に話し掛けてくれるのがすごくうれしいです。私が一年の頃は、三年生に話し掛けるのはすごくビクビクしていました。

他の先生に聞きましたが、三年生が一年生の教室に入ることや、一年生が三年の教室に来ることは、普通の学校ではないと言われて——。

私たちからしたらそれが普通です。

他から見たら学年の差がないぐらい、生徒同士の仲がいいです。

みんなに知って欲しいこと



西条 私は小さい学校に来たことがなかったので、さつきも言ったように先輩が先輩に「○○先輩」と呼ばないことに、最初はびつくりしました。

三年生に向かって「○○さん」とか下の名前で呼んでいて、それが新鮮でびつくりして、オロオロしました。教室にも普通に同級生のように先輩がいて……。怖かったわけではないですが、驚きはありました。

みんな仲のいい証拠で、それを見て三崎高校を選んで良かったと感じました。

先生たちも結構、フレンドリーな感じですよ。

私は中学校のときには絶対に先生にはなりたくないと思っていました。先生はいつも忙しそうに何かに追われている感がすごくて、先生になる意味が分からないと感じていました。

三崎の先生は、追われていたとしても楽しそうにっていて、キラキラ輝いている感じがすごいです。先生には絶対にならないと思っていましたが、先生もそんなに悪くないという気持ちになりました。

——西条さんの目には、生徒同士だけではなく、先生も光っているように見えるのですか？

西条 「アレしないけん、コレしないけん」と先生はいつも言いますが、

それが嫌そうではありません。先生たちも楽しんでいるので、生徒も楽しめている感じがします。

伊方 三崎高校は全学年で一クラスずつで、他の高校に比べたら少ないですが、逆に一人ひとり、「したいことができる」といいますか。

さつきみんなも言っていました。先生との距離が近いので、先生からも「こんなイベントがあるよ」と勧めてもらえます。

西条ちゃんは今度、「トビタテ」というのに参加するらしいです。

三崎教諭 どこに行くか知っていますか？

伊方 アイルランドです。

他にもリーダー養成塾に参加する子や、去年だとOne Young World だとか……。

他校だと声を掛けられる人も限られているし、超優秀な人だったり、すぐくやる気がある人だけになってしましますが、三崎高校では気軽に、興味を持ったら参加できる空気があります。

そこが三崎高校のいいところです。体育祭も文化祭も、いろいろなことができます。

オブラートに包んだみたいで、すみません(笑)。

高校魅力化の目的と生徒にとっての意義

——三崎高校生徒の学びについての語りから

樋田有一郎

高校魅力化は生徒にとってどのような意味があるのだろうか。われわれは、素朴に疑問を持った。文科省の政策的な意図や、学校の教育的意図、地域からの期待、現代社会にとっての意義……、われわれはそうした観点から生徒の学びを見てしまうことが多いのではないだろうか。そのこと自体が有意義であることは間違いないが、そのまえに、そもそも生徒にとって、高校魅力化の取り組みはどのような意味を持っているのか。私たちは、そうした素朴な疑問に取り憑かれた。

われわれの高校調査は、これまで参与観察が中心であり、個々の場面での生徒の言動や、場面に即した簡単な聞き取りを行ってきた。その結果、個々の場面での断片的な生徒像を捉えることができたが、全体像をつかむことが困難であり、生徒の包括的な様子を報告書の読者に知ってもらうことも困難であった。

『地域人材育成』第一号は、愛媛県立三崎高等学校せんたん部生徒へのインタビュー結果を報告する。今回は、包括的と言うにはおこがま

しいインタビューであるが、これまでは知ることのなかった側面を知ることができた。

☆

三崎高校訪問インタビュー調査の全体像を紹介すると、インタビュー対象者は校長先生、せんたん部担当教諭、高校魅力化に協力する住民二名、町役場職員、そして生徒四名を対象とした。生徒インタビューは四名に対する集団インタビューの形式をとり、担当教諭に同席していただいた。本人及び高校の了解のもとで録音され、後日、業者によってテープおこしされた。生徒インタビューの概要については、報告書冒頭を参照されたい。

三崎高校は昭和二五年度の開設で令和元年で六九周年を迎えた。報告書冒頭の繰り返しになるが、全校生徒は八四名（令和元年）で、生

徒数減少のため本校の位置づけから分校の位置づけへの高校再編の危機にあった。

所在地の伊方町にはいくつかの元気なNPOがあり、町に加えてNPO関係者からの強力な支援を得ている。

三崎高校は一人一人の生徒が輝くことができることを謳っている。このことは生徒インタビューの印象と一致している。三崎高校は少人数だからこそ、いわゆる「個別最適化された学び」を行い易い高校である。

三崎高校は愛媛県の「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」の指定を受けており、生徒は地元祭りの支援、イベントの支援、ボランティア活動を積極的に行っている。特色のある教育活動としては、生の蜜柑を包んだ「みっちゃん大福」の開発と販売、漂流ブイを活用した「ブイアート」プロジェクトの実行、さまざまな高校、大学、NPO、役場職員などが参加した「せんたんミーツイング」の開催、健康体操（「みさこう体操一一五」）の考案と施設・イベントでの普及活動、映画『せんたんビギンズ』の制作と上映など、多岐にわたっている。

☆

本報告書は「生徒の学び」を報告することが狙いなので、ここでは、三崎高校の教育改革を特徴付ける高校魅力化については、背景として簡単な説明をするにとどめたい。

島根県で始まった高校魅力化は離島・中山間地域の高校で中退率が

高まり、入学生徒数が減少する中で、高校生活と進路形成との両面で生徒が魅力を感じることが出来る高校を作ろうとしたことが始まりであった。今から、高校魅力化という名前で改革を始めようとしている高校も概ね同じ方向性にある。

魅力化を図るための方法として当初も今も有力視されているのが「地域の特色を生かした教育」である。活性化に向けて歩み出した地域には学びの課題があり、地域住民は高校教育の支援に（高校とともに地域を活性化することに）積極的である。

われわれが知っている事例では、高校が地域の教育資源を高校の都合で一方的に利用しようとする姿勢でいると住民や町が戸惑うことになる。住民や町と生徒が協働で地域の課題に取り組みとときに高校魅力化の教育改革はめざましい魅力を生み出している。

※高校魅力化の取り組みについては、樋田・樋田（二〇一八）や地域教育魅力化プラットフォーム（二〇一九）で紹介されているので詳細はそちらをご参照いただくか、あるいは、われわれの研究会のホームページ（「地域人材育成研究会」で検索してください）をご参照いただきたい。

☆

生徒インタビューの生徒の語りから、これまでの研究では焦点を当てられることが少なかった四つのことを指摘しておきたい。

第一は、生徒は、「地域の人に笑顔になってもらうのは、すごく達成感を覚える側面でもあります。」「みんなの笑顔につながっていくので、すごくやりがいになります。」などの表現で、(地域の人の)笑顔という表現を使っており、それが生徒の動機付けになっていることである。

第二は、「マイナスな意見を言われて感情的になるのではなく、客観的な意見なら改善する必要もあるんじゃないか? 逆に改善する必要はなくて、このままでいい伝統的な部分はちゃんと残すように向き合っていく必要もあるんじゃないか? と受け止めたんです。」「少しでも良くできるなら、良くしていけばいいことです。」などの語りで見られるように、地元を好きか否かではなくて、働きかける対象として地元を見ることができるとも、しかも、それを自分自身の言葉で語ることができている。

第三は、生徒は、「三崎は自分がしなければ誰もしてくれないことがたくさんあります。自分から積極的にやる必要があるんで、誰かを待つのではなくて自分で前に出ていけるようになったのが一番、成長したところですよ。」「活動のなかでたくさん人前に出る機会が増えたので、人前で話す力や緊張をしなくなった面では成長できました。」「距離が近いので、あの子に言ったらしてくれそう、というのが見て分かるようになってきました。それで同じ学年の人にも話しかけられるようになって、変わりました。」「悩む前にとりあえずやってみたらいい、と思うことが増えました。」などと語っており、学んだと思うこと、成長したと思うことに関しては、仲間との関係作りが上達したことや、人前

で話せるようになったことが語られている。しかもそうした成長をしたことに自覚的であり、しっかりと語ることが出来ることである。

第四は、三崎高校は卒業後に地元を離れて県内外の大学に進学する者の割合も高い。インタビュ対象の生徒は、卒業後にいったん地元を離れてから地域や友人とどう関わるかという視点から自分の将来を考えていた。このことは、生徒が自発的に「関係人口」すなわち、町外に住みながら町に関心を持ち町に対する支援を行う人としての自分の将来像を描き始めているという点で興味深い。

三崎高校の取り組みの生徒にとっての大きな意味は、文科省が描いている地域学校協働を成功させることではない。また、地方創生という社会的使命を達成することでもない。そうしたことに意味がないわけでは無いし、そうしたことを意識して学ぶことは地域とのつながりが強い高校教育の重要なゴールでもある。

しかし、生徒は笑顔を見ることを強い動機付けにしている。学びの面では、自分自身の成長を自覚し自分の言葉で語ることができている。進路意識の形成の面では、高校の地元地域とどのように関わるかという視点(関係人口の視点)を含んだ進路意識を自発的に形成している。これらのことは、文科省の政策的な意図や、学校の教育的意図、地域からの期待、現代社会からの要請とはやや異なるものである。インタビュの中で語られたことは、地域の特色を生かした教育の学習指導や進路指導が狙いとして、これらに対して再考を促すものである。

最後になりましたが、三崎高校の生徒と先生方の協力をえて、生徒インタビューの実施と本報告書への掲載を行わせていただきました。感謝いたします。

また、本報告書を手にした中学生とその保護者の方に対しては、本報告書を三崎高校での高校生活を知る機会としていただけると幸いです。

本誌の著作権の全ては本研究会に帰属します。

ただし、出典を記載してあれば、本誌の一部または全部を複製や改変や再配布することができません。

本誌をみなさんでご利用いただけましたら幸いです。

ただし写真に関しては、写真を抜き出して複製や改変して利用する場合には、愛媛県立三崎高等学校の許可を得ることを条件といたします。

本誌に使用されている写真は、愛媛県立三崎高等学校から提供を受け、本誌での使用の許可を得ています。

〈参考文献〉

- ・樋田大二郎・樋田有一郎 二〇一八 『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト——地域人材育成の教育社会学』、明石書店
- ・地域教育魅力化プラットフォーム 二〇一九 『地域協働による高校魅力化ガイド…社会に開かれた学校をつくる』、岩波書店